

札幌孝仁会記念

人工関節センター！股関節疾患センターを開設

低侵襲治療で患者負担減

西区の札幌孝仁会記念病院（齋藤孝次理事長、入江伸介院長・276床）は、人工関節センター・股関節疾患センターを開設した。札幌大などで、股関節疾患の治療を手がけてきた名越智副院長が、同センター長に就任。長年の研究による技術と知識を生かし、さまざまな疾患に対応していく。

名越センター長は、札幌器治療開発講座」で、医大卒業後、米国シアトルにあるワシントン大に留学、滝川市立病院勤務ののち、札幌大勤務時に寄附講座「生体工学・運

術、寛骨臼回転骨切り術」などの治療を行ってきたほか、股関節における人工関節、術式の開発に携わり、4月から現職に就任した。

同センターでは医師、急性期看護師、薬剤師、リハビリスタッフとともに、チーム医療で患者に

対応する。

「変形性股関節症は人工関節置換術を選択することが多い。筋肉を切離す後方アプローチは術後、治るまで時間かかり、骨頭が外れるケースもあった。我々は、前側に、チーム医療で患者に

アプローチで、筋肉や神経を傷つけない低侵襲治療を意識している」と名越センター長。

人工関節手術が実施されるようになってから長期間が経過し、経年劣化等への対応が求められていることから、人工股関節再置換術も同センターで行っている。特に再置換術時に弛んでいない人工関節をノミを入れて抜去する場合は、骨がバラバラに壊れるケースがあるが、名越センター長は骨を縦にスプリットし、大腿骨にノミを入れて取るという技術を開発している。

また、同センターでは3Dプリンタを活用し、術前に患者の骨格に適合するかどうかシミュレーションも実施している。3Dプリンタは患者のCTデータをSTLデータに変換し、コンピュータ上で骨格モデルを再現し立体モデルを作製する方法。患者の病態を把握できるほか、必要に応じて説明にも利用する。

現在、人工関節置換術の全国件数は、股関節年間7万件、膝関節10万件以上。高齢化社会の到来とともに年々5%ずつ増加しており、同センターの手術は2〜3カ月待ちという。

同センターは治療だけではなく、世界の最新情報を収集し、デバイスの開発、臨床研究を進めていくほか、教育も担い、「全国から手術見学なども積極的に受け入れていく。若手育成のため、最新技術を伝えていきたい」と話す。



人工股関節再置換術も対応